

第10回パーキンソン病・運動障害疾患コンgres (京都)

平成28年10月6日～10月8日

認知症状が見られた特発性基底核石灰化症の一例

稲山 靖弘 渡辺浩年  
医療法人 聖志会 渡辺病院

症例は80才女性。高血圧にて内科通院中。

X-5年、転倒し第2腰椎圧迫骨折を認め、保存的治療された。以後、杖歩行するも、現在自宅で家族と生活している。

X-1年から物忘れが出現した。HDS-R14点。立体模写完成。SDS40点でややうつ傾向。歩行時杖を使用しているが、入浴、排泄は自立。振戦、固縮は見られない。TUG19秒、Hohen-Yahr stage 該当せず、UPDRS partIII 17点、要介護2。頭部CTにて両側基底核石灰化著明。頭部MRIにて両側淡蒼球の石灰化著明、海馬萎縮認めず。脳SPECTにて、有意な血流低下を認めない。Ca、P、PTH正常範囲内。

以上から、特発性基底核石灰化症と診断した。本疾患は無症状なものから、歩行障害、物忘れ、精神症状、精神発達遅滞、不随意運動、てんかんなど多彩な症状が見られるなど、症状は多岐にわたるとされている。今回我々の経験した症例は、明らかな錐体外路症状を認めず、認知症を主症状として発症したものであり、今後の経過観察が重要と思われた。